

記憶の糸をつむぐ
奴隷制をめぐる本国と植民地

吉田信

はじめに

1. オランダにおける植民地の記憶
2. 奴隷制を記憶する——オランダ
3. 奴隷制を記憶する——スリナム

おわりに

はじめに

歴史の叙述は、国民国家の形成と密接に結びついている。国民国家形成以前の歴史が、宗教的世界観を背景とする目的論(終末論)的な叙述により彩られていたとするならば、「政教分離」によって宗教的権威とその世界観を諸個人の私的領域に押し込めることに成功した近代国家は、世俗権力を歴史叙述の中心に据え、主体としての国民形成を基点とする歴史を打ち建てた。国民国家による歴史の独占状態は、具体的には各国史という形式により象徴される。また、主体である国民ひとりひとりの歴史が国家の歴史と同一視され、その中に位置づけられることも意味する。個人の歴史は、その生涯において生じた国民国家の歴史的事象を参照することで確認されてきたと言ってもよい。

だが、国家の境界はグローバル化の進展により物理的にも心理的にも揺らいでいる。それに応じて、これまで歴史の主体として描かれることのなかった人々の記憶が、社会的承認を求め溢れ出している。こうした動向は、個人の記憶と国家の歴史とが齟齬なく結びついてきた時代の終わりを確実に示している[テッサ・モーリス＝ズズキ 2002]。記憶と歴史をめぐる議論は、それぞれの国の置かれた歴史的・政治的・地理的な状況と密接に絡んでいる。同時に、それは国境を越えた記憶の場を探り、ナショナル・ヒストリーに回収されることのない歴史叙述を構築する作業をも意味する。

この報告書は、本国と植民地における奴隷制の記憶をあつかう。ここでは、奴隷制を記憶する試みがどのようになされているのかを、旧宗主国であるオランダ本国と、かつての植民地であったスリナムを対象とし、整理していく。スリナムは、オランダの植民地として、オランダ領西インドを構成していたが、1954年に締結されたオランダ王国憲章(Statuut voor de Handelingen van de Tweede Kamer der Staten-Generaal der Nederlanden)によって本国と同等の地位を得、1975年には独立を果たしている。

本国と旧植民地とにおいて、奴隷制の記憶は、どのように共有されているのか。記念碑や祝日の分析を通じて、その概観を試みる。そのことにより、記憶の共有にともなう可能性と限界を提示したい。

1. オランダにおける植民地の記憶

オランダは、現在、ヨーロッパの小国の代表的存在として認められている[百瀬 1990]。だが、オランダは、世界システムにおける最初の覇権国家として、東西両インドに植民地を領有する「帝国」でもあったことに留意すべきである。このうち、東インドはインドネシアとして1950年に最終的に独立を果たし、西インドは1975年にオランダ領ギアナがスリナムとして独立する。スリナムとともにオランダ領西インドを構成していたカリブ海に位置する6つの島は、現在オランダ領アンティルおよびアルバとして、オランダ王国の一部を構

成する自治領となっている¹。オランダが、これらの領域に対して植民地支配の基礎を確立するのは、17世紀にさかのぼる。レンブラントやフェルメール、スピノザが活躍し、東西両インド会社が世界を席卷したこの時期を、オランダ人は「黄金の世紀 (De Gouden Eeuw)」と呼ぶ。「黄金の世紀」こそ、オランダ社会にとって、失われた、しかし栄光に満ちた時期として記憶され、歴史の根幹を成しているといつてよいだろう。このことは、アムステルダム国立博物館を訪ねることにより、文字通り体感することが可能である。歴史部門と美術部門の二つの展示館を備えた博物館の中核を成すのが、質量ともに最大の割合を占める17世紀の展示物に他ならない。

この時期、世界システムの覇権国家としての役割を担うことにより、オランダは「帝国」としての繁栄を享受する。だが、オランダ人にとっての「黄金の世紀」とは、植民地主義を展開する契機でもあった。言い換えれば、国民の歴史の根幹を構成してきた出来事こそ、現在の記憶に修正を迫る要因を形成したともいえる。

「黄金の世紀」にその基盤を確立することとなった植民地は、オランダ社会にどのように記憶されているのだろうか。はじめに確認しておかねばならない点は、多くの国同様、オランダにとっても、社会的に共有されている記憶とは、第一に戦争の記憶を意味することである[van Sas 2005: 191]。戦争とは、なによりも第二次世界大戦によるドイツの占領体験と、それに対する抵抗を意味する。現在でも、1945年5月4日と5日の終戦記念日には、オランダ全土で様々な式典が執り行われ、王室を頂点に、国民的な記憶の再生産が国家的規模で組織的に続いている²。アムステルダムの王宮前、ダム広場にそびえ立つ塔は、この記憶を象徴するモニュメントである。同時に、第二次世界大戦の終結にともなうこの記憶は、植民地とのかかわりからみると、オランダにとってインドネシアの独立をめぐる新たな、しかも泥沼の戦闘のはじまりでもあったことに留意せねばならない。

戦争をめぐる記憶を構成する点では同じであっても、ドイツによる占領体験とインドネシアとの戦闘では、両者の相違点に注意を払う必要があるだろう。中立を宣言したにもかかわらず、ヒトラーの電撃作戦により、ほとんど反撃の余地もなく全土を占領されたオランダにとって、占領からの解放は連合国という勝者の立場からの肯定的な記憶の共有を可能にした。だが、インドネシアとの戦闘では、徴兵により相当数の国民が動員されたうえに、大規模な戦闘に従事、かつ死傷者を出している。さらには、事実上の敗戦により結果的にインドネシアの独立を認めざるをえなかったことなど、この出来事はオランダ社会のトラウマとして記憶されている。したがって、戦争をめぐる記憶という観点からは、ドイツによる占領体験からの解放がオランダ社会の共通の記憶を積極的に形成する一方、旧東インドに関する記憶は、戦後復興の陰に隠れ言及されることが

¹ オランダ領アンティルとアルバは6つの島から構成され、それぞれの島の頭文字をとりABC及び3Sと呼ばれていることがある。ABCとは、アルバ(Aruba)、ボネール(Bonaire)、キュラソー(Curaçao)であり、3Sとは、シント・マールテン(Sint Maarten)、シント・エウスタチウス(Sint Eustatius)、サバ(Saba)である。アルバはひとつの島で独自の地位を持つ自治領である。他の5つの島はオランダ領アンティルとして自治領を構成し、キュラソーに行政府が位置する。

² 1987年以降、勅令により設置された委員会が式典に責任を負っている。

<http://www.4en5mei.nl/portal/home.2>

なかったか、あるいは「負」の遺産として社会の周縁部にとどまり続けてきた(図 1)。

だが、第二次世界大戦終結 50 周年を契機として、オランダでも歴史の「影」に対する関心が高まってくる。たとえば、ピエール・ノラによる『記憶の場』で提起された課題を受ける形で、オランダでも自国の記憶を見直す試みがなされる。ここでは、オランダ史を構成する重要な歴史的事象を再検討する過程の一環として、東インドにかかわる記憶の見直しもおこなわれた[van Sas 2005]。東インドをめぐる記憶の見直しは、これにとどまることなく、さらに展開していく。

1998 年に出版された伝記は、東インドに対する「負」の遺産をオランダ人に強く意識させることとなる。この伝記は、両大戦間期のオランダを代表する政治家、したがってオランダ史の表舞台上で記憶されるべき重要な人物であり、5 度に渡り首相を務めたコレイン(H. Colijn)を扱ったものであった[Langeveld 1998]。この本が単なる政治家の伝記にとどまらなかったのは、1894 年の第二次ロンボク征討へのコレインの関与を明らかにした点にあった。そこでは、パリの女性や子供の処刑に対するコレインの関与や、オランダ軍がいかにも平然と現地住民の殺戮を遂行していたかが示され、東インドをめぐる記憶の陰惨な側面と、それがオランダ史の裏面にいかに深く刻まれているかを示すこととなった。

また、日本でも不十分ながら紹介がなされたように、1999 年にはアムステルダム国立博物館において「オランダ人・日本人・インドネシア人(Nederlanders Japanners Indonesiërs)」と題する展覧会が開催された[Raben 1999]。この展覧会では、オランダによる植民地の獲得・支配・喪失に関する歴史的過程の展示が著しく限られていたことや、すべての日本兵がオランダ人捕虜の虐待に関与していたのではないことが指摘されつつも、そのような日本兵がキリスト教徒である点に重点が置かれていたことなど、展示内容について様々な問題点をあげることができる。展覧会の背景には、日本による東インド占領下で虐待を受けた旧軍人や民間人の日蘭両政府に対するこれまでの抗議が存在していた。オランダ政府は、翌年に予定されていた天皇訪蘭を控え、国立博物館での展覧会を開催することにより、こうした不満の解消を狙ったともいえる。

しかし、展覧会の最大の問題点は、インドネシア人の「不在」に集約されていたといってもよい。日本に巡回した展覧会は、日本国内でもさまざまな議論を巻き起こした[岩崎 2001; 佐藤 2001]。だが、オランダ国内での展示同様、日本における巡回展にともない交わされた議論でも、日本側とオランダ側との戦争責任の所在をめぐるなすりあい終始した側面が強い。こうした悪循環に陥っている限り、日本とオランダが互いに争っていた「場」に本来位置すべき主体が誰であったのか。また、彼らが両者をどのように認識し、理解していたのかに想像力を働かせることは困難だろう。

他方、このような東インドをめぐる記憶の見直しは、インドネシアの独立にともないオランダ本国に「帰還」した人々の封印されていた記憶を開放する契機ともなった。写真集や小説、さらに個人的な書簡が公刊され、ノスタルジーに彩られた植民地での生活や、それを破壊した日本の侵略の記憶が封印をとかれたように語られはじめる[Haasse: 2002; Kousbroek 1995]。しかし、オランダの植民地を構成していたもう一方

のインド、すなわち西インドに関する記憶については、一貫して沈黙が支配していたといえる。

2. 奴隷制を記憶する——オランダ(旧宗主国)

オランダの「黄金の世紀」は、東西両インドの植民地によって支えられていた。西インドでは、コーヒーや砂糖、塩のプランテーションが導入された。こうした西インドでの生産を支え本国に富をもたらしていたのが、奴隷たちである。だが、イギリスやフランスと比較した場合、オランダの西インド統治には、いくつかの特徴が存在していた。たとえば、スリナムを除き、他の地域では大規模プランテーションが発展しなかったことや、現地住民の改宗(プロテスタント)および言語(オランダ語)の強制にさほど成功しなかったことなどが指摘されている[Oostindie 1996: 69-85]。

オランダの奴隷貿易は、黄金海岸に位置したエルミナ要塞(現在のガーナ)から中継基地のキュラソーへ奴隷を運び、いったん休息を与えた後、イギリスやフランスへ転売、あるいはスリナムへ直接奴隷を運ぶ経路をとることが多かった[Emmer 2000: 60]。オランダの従事した奴隷貿易により、アフリカ大陸から約 50 万人が強制的に移住させられたと見積もられている。奴隷貿易は、1814 年にイギリスの圧力を受けて廃止された。だが、西インドでの奴隷制は継続し、西欧諸国では最も遅い 1863 年 7 月 1 日に廃止された。奴隷制の廃止が遅れた理由は、本国での無関心によるものといわれている[Oostindie 1996: 69-85]。

オランダの啓蒙主義は、奴隷制廃止に関知せず、キリスト教系団体による奴隷制廃止運動も、1850 年代まで実質的な運動を展開してこなかった。奴隷制廃止をめぐる議論自体は、イギリスからの圧力を受けて 1840 年代から議会で交わされてきたが、奴隷所有者への補償をめぐり、実際の廃止は遅れることとなった。奴隷制廃止に際し、奴隷の所有者には奴隷一人あたりにつき当時の額で 300 ギルダールの補償金が政府によって支払われたのみならず、奴隷制の廃止後 10 年間、解放されたはずの元奴隷は、かつての主人のためプランテーション労働に従事しなければならなかった。

奴隷制廃止をめぐる歴史的経緯は、そのままオランダ本国での奴隷制をめぐる記憶の基層を形成してきた。東インドの記憶が植民地支配の忘却とノスタルジーにより特徴付けられてきたとするならば、西インドをめぐる記憶は、その不在によって特徴付けられるのである。オランダでの奴隷制廃止は、イギリスとは異なり、一部の政治的エリートの関心事でしかなく、国民的な関心事とは決してならなかった。奴隷制の過去は、奴隷貿易商や奴隷所有者のみならず、奴隷の子孫にとっても否定され、忘れ去られるべき過去でしかなかったのである。

こうした事態に変化をもたらす契機となったのが、2002 年 7 月 1 日にアムステルダムの東公園でおこなわれた奴隷制廃止を記念するモニュメントの除幕式である。式典には、ベアトリクス女王をはじめ、コック首相(当時)やアムステルダム市長、旧西インド領のスリナムやオランダ領アンティル諸島およびアルバからの政府関係者、アフリカ諸国からの大使ならびにかつての奴隷および奴隷商人の子孫も参列した。当日は、

招待状を持たないアフリカ系住民が式典への参加を求め会場周辺を取り巻き、騒然とした雰囲気の中、式典は執りおこなわれた[De Volkskrant 2 juli 2002]。

記念碑の除幕式に先立つ 1 年前に実施されたコンペの結果、スリナム人の彫刻家エルウィン・デ・フリース(Eriwin de Vries)の作品が選ばれた(図 2)。エルウィン・デ・フリースによる記念碑は、過去・現在・未来という時間軸にそって、各部を異なるサイズで組み合わせることにより全体が構成されている。奴隷として鎖につながれ、くびきにあえぐ姿は過去を(図 3)、奴隷制が廃止され自由な主体として解放される姿が現在(図 4)、そして未来に向けて飛翔する姿である。このモニュメントは、他のコンペ案と比べても適度な抽象性と具象性を兼ね備え、時間軸における変化と、それぞれの像のサイズに変化を持たせることで、ダイナミズムを前面に押し出すことに成功したといっただろう。

また、記念碑の設置されたアムステルダム東公園は、かつての植民地博物館、現在の熱帯博物館(KIT=Koninklijk Instituut voor de Tropen)に隣接し、周辺の地区は東西両インドを出自とする移民の多く居住する地域である。記念碑の設置場所については、さまざまな議論が交わされた。奴隷貿易により多大な恩恵を被ったミッデルブルフやロッテルダムこそ記念碑の設置される場所としてふさわしい、という意見も有力であった。オランダでは、地方自治体が記念碑の設置に関する権限を有している。アムステルダム市長のヨブ・コーヘン(Job Cohen)は、労働党の政治家で、自身ユダヤ系の出自でもあり、マイノリティ問題に関する強い関心を示していた。また、アムステルダムも西インド貿易との歴史のかかわりの深いことなどを考慮し、記念碑設置の受け入れを表明、東公園をその場所として定めた。この場所を選ぶことで、記念碑に「多文化共生」の意図を込めたのである。

記念碑の設置に至る過程を検討すると、さまざまなアクターの思惑が交錯した結果としてモニュメントの除幕式に至ったことが浮かびあがってくる。モニュメントに向けた最初のイニシアチブは、1998 年 7 月、アフリカ系女性団体が奴隷制に関する国民的取り組みを政府に求める請願を議会に提出したことに発する。この年、オランダでは 1848 年に実現した立憲主義的憲法の改正 150 周年が祝われていた。同時に、1998 年は、1863 年の奴隷制廃止から数えて 135 周年でもあった。請願を提出した団体は、自由主義の基礎を確立することとなった憲法改正の記念の年が、奴隷制廃止についてなんら言及することなく過ぎていくことに疑念を抱いていた。

請願を提出した団体は、オランダ国外における奴隷制の過去をめぐる動向にも注意を払っていた。フランスは、この年を 2 月革命と奴隷制廃止 150 周年として祝っていただけでなく、国民議会では奴隷制を「人道に反する罪」とする法案が提出されていた。アメリカでもクリントン大統領(当時)による奴隷制への謝罪が表明され、こうした一連の動向を背景に、オランダ政府による奴隷制への公式な謝罪、記念碑の設置や奴隷制の歴史の再評価を請願は求めていたのである[Biekman 2002: 26-29]。

当時の内閣は、労働党(PvdA)、自由民主人民党(VVD)および民主 66(D66)の連立内閣(第二次コック内閣)であり、政策の中心課題のひとつとして多元的価値の承認をかかげ、マイノリティの社会統合に積

極的な姿勢を示していた。そのために、無任所担当大臣として、「大都市および統合政策担当大臣」のポストを設け、ファン・ボクステル (Van Boxtel) を大臣として任命していた。移民の多くがオランダの 4 大都市、アムステルダム、ロッテルダム、ハーグおよびユトレヒトに居住していることから、これら都市における住宅問題にはじまり、社会への定着を促す移民の社会的な統合政策の必要性が強く意識されていたのである。さらに、政権担当時に享受していた安定的な経済成長は、請願の実現を予算面で可能にすることとなった。こうした偶発的な要素が重なり合うことで、議会での審議を経て、政府は奴隷制廃止を記念するモニュメントの設置を決定した[Handelingen van de Tweede Kamer 1998-1999, 26 200-VII, nr.44]。

交渉にあたって、政府は窓口をひとつにまとめるため、請願を提出した団体を中心に 13 の団体を糾合した「奴隷制の過去に関する国立記念碑協議会 (通称プラットフォーム:)」を構成させた³。交渉の過程では、政府とプラットフォームとの間で、奴隷制の記憶をめぐる「政治的陣地戦」が繰り広げられた。アフリカ中心主義や奴隷制に対する補償など、プラットフォームの「過激化」を危惧した政府は、より「中立的」な立場の委員会 (het Comité van Aanbeveling nationaal monument slavernijverleden) を設置する⁴。奴隷制の記憶が国民に共有されるためには、特定の団体が記憶を独占してはならないと主張する政府と、専門家や政府による記憶の「管理・公定化」に抵抗するプラットフォームとの間で微妙な見解の相違が表面化した。結局、政府とプラットフォームは、二つの要素からなるモニュメントを設置することで合意に至る。「静的」なモニュメント——今回の記念碑——と、奴隷制に関する研究機関設置・歴史教科書の書き換え・テレビ番組制作を通して記憶の国民的共有を促す「動的」なモニュメントである[Handelingen van de Tweede Kamer 1999-2000, 26 333, nr. 14]。

奴隷制の記憶の社会的承認に向けた動きは、政府とプラットフォームとの協議の間も進んでいった。1999 年には奴隷制の過去をめぐる大規模なシンポジウムが王室財団により主催され、王族を迎え開催された[Oostindie 1999]。2001 年 8 月 27 日から 9 月 8 日にかけて南アフリカのダーバンで開催された「国連反人種主義・差別撤廃世界会議」では、オランダ政府を代表して統合政策担当大臣が奴隷制の過去に対する「遺憾」の意を表明 (補償については慎重な立場を崩さなかった) するとともに、政府によるモニュメントの取り組みを説明した⁵。次期王位継承者のウィレム＝アレクサンデル王子も、かつてオランダの主要な奴隷供給源であったガーナを 2002 年 4 月に公式訪問した際、奴隷制の過去に対する遺憾の意を公式に表明、一連の事態は奴隷制の記憶に対する社会的関心を喚起していった[RNW Nederlands Nieuws, 18 april 2002]。

奴隷制の記憶の共有に向けた動きは、植民地の遺産をかかえるオランダ本国の現状を反映したものである。旧西インドのスリナムは 1975 年に独立、残るカリブ海の 6 つの島は現在オランダ領アンティル及びアルバとして自治領を構成している。1960 年代には、旧西インド出身者は労働移民としてオランダ本国に居

³ <http://www.platformslavernij.nl/>

⁴ <http://www.slavernijmonument.nl/start.htm>

住するようになる。オランダ国籍保持者であるアンティル出身者に対しては、法的な平等が保障されている。また、スリナムの独立にあたっては、オランダ国籍かスリナム国籍かの選択が認められ、多くの移民がスリナムからオランダに移住した。だが、教育水準や言語(アンティルの主要な島ではパピアメント、スリナムではスラン・トンゴと呼ばれるクレオール語が話されている)障壁がオランダ本国での労働市場への参入を困難にし、彼らの多くは社会的に周辺化されてきた。文化規範の相違に基づく相互の誤解も、こうした傾向を促している。奴隷制の記憶の共有は、「政治的に正しい」道義的要請であるのみならず、政府にとってはマイノリティの社会的統合の手段としても理解されていたのである。

オランダ本国での奴隷制廃止を記念するモニュメントの設置は、マイノリティの社会的統合手段として、ある意味では理解しやすい構図を提供している。それは、本国に移住してきた旧植民地出身者が、移住先の社会で周辺化した結果、単なる社会政策の対象であることを超えて、自己の存在の社会的承認を要望するといった一連の過程から派生したものである。これは、宗主国の内部に浸透した植民地の遺産と言い換えることもできる。宗主国にとって脱植民地化とは、自国の内部に植民地の遺産をかかえることに他ならない。では、そもそも植民地としてオランダに支配されていた地域では、奴隷制はどのように記憶されているのだろうか。

3. 奴隷制を記憶する——スリナム(旧植民地)

スリナムでは、現在、奴隷制の廃止された1863年7月1日を、**Keti Koti Dey**(ケティ・コティ・デイ:鎖を断ち切る日)として祝っている。だが、奴隷制廃止からしばらくの間、7月1日が社会的に祝われることはなかったようである。例外は、教会勢力(大部分はモラヴィア教会派)であり、1863年以降7月1日を教会で祝うことが常であった。しかし、教会が奴隷制の廃止に向けて積極的に動いた形跡はなく、むしろ植民地当局と協調しつつ、勢力の拡大を目的とした奴隷への布教に関心があったといわれている。奴隷制廃止後は、解放された元奴隷への布教の徹底により、彼らの文明化を進めることに力点が置かれた。しかも、元奴隷への布教にあたっては、奴隷制の廃止を神の恩寵とみなし、オランダ国王ウィレム3世の徳によりそれが実現したと説くことで、植民地権力の維持に細心の注意を払ったのである。

だが、20世紀初頭には、7月1日の「世俗化」、すなわち教会の外の広範な層への呼びかけがはじまる。その契機となったのが、アメリカ合衆国における黒人の地位向上運動との接触であった。ブッカー・T・ワシントンや、デュボイスたちの主張は、当時の英領ギアナ経由で、あるいは直接アメリカ合衆国で学びスリナムに帰国した者とおして、スリナムにも浸透することとなった。1904年の7月1日には、宗教講話との名目ながら、実際には合衆国での思想と運動を紹介しつつ、スリナム人の黒人意識を覚醒させる活動がなされた。これは、スリナムにおいて、アフリカ系住民を束ねる核に7月1日を据えようとするはじめての試みとなった。

⁵ <http://www.un.org/WCAR/statements/netherE.htm>

この試み自体は、必ずしも教会と植民地当局に敵対するものではなかったが、この日に付与された宗教的解釈は徐々に退いていった[Stipriaan 2004: 271-283]。奴隷制廃止 50 周年を迎えた 1913 年には、教会も黒人地位向上運動に言及し、さらには記念碑も建立されている。だが、この記念碑の設置場所は地方都市(ニウ・ニッケリー)であり、設立の経緯も明らかではなく、これをもって奴隷制の記憶がこの時期までに広く社会に共有されていたと推測することは困難である⁶。

しかし、パリでパン・アフリカニズム会議の行われた 1919 年には、政府に対して 7 月 1 日を国民の祝日とすべき要望が出されるなど、この日を忘却ではなく、肯定的に記憶する日と捉えなおす動きが進んでいった。7 月 1 日の社会的な認知は、1940 年代に決定的になる。とりわけ、第二次世界大戦後の 1946 年、クーンデルス(J.G.A. Koenders)によって創刊された月刊誌「フーツー・ボーイ(Foetoe-boi)」は、7 月 1 日を国民の日と呼び、オランダ本国でのドイツ占領からの解放記念日になぞらえて、自由の日と提唱していた[Paramaribo Post 19 juni 2003: 24]。クーンデルスは、オランダ語にかわって現地のクレオール語である「スラン・トンゴ(Sranan Tongo)」を紙面に用いることで、言語ナショナリズムの開拓者となったのみならず、ナショナリズムの核に奴隷制の過去を積極的に据えたのである。

こうした世俗化の仕上げは、政治過程を通じた祝祭化で頂点をむかえる。1952 年に、7 月 1 日は、宗教的言説から、政治的言説の舞台へとその場を移した。この年の 7 月 3 日、議会において数名の議員が 7 月 1 日を国民の自由の日とする法案を提出した。法案提出にあたり中心的な役割を果たした議員が、後に首相となるペンゲル(J.A. Pengel)であった。ペンゲルによれば、奴隷制の廃止はアフリカ系スリナム人のみにかかわることではなく、それにより「スリナムが、新たに様変わりすることとなったのであり、そのことは国全体に関係するのである」と議会で説明していた[Handelingen/Bijlagen Staten van Suriname, 1952-1953: 50]。

この時、ペンゲルたちの法案に反対を表明したのが、ラシモン(J. Lachmon)を党首とするヒンドスタン政党であった。ペンゲルとラシモンは、20 世紀スリナムを代表する政治家といわれ、1952 年にペンゲルが労働組合連合を設立した際に弁護士でもあったラシモンを法律顧問として迎えるなど、両者は密接な関係を結んでいた。奴隷制の廃止された後、スリナムには奴隷にかわる労働力として、香港やマカオから華人、オランダ領東インドからはジャワ人、英領インドからヒンドスタンが契約労働者として移住しており、これらエスニック・グループは、華人を除き 1950 年代までに独自の政党を設立していたのである⁷。

ヒンドスタン政党は、7 月 1 日がクレオール住民のみにかかわるものであるとの見解を述べ、法案に反対

⁶ この時期のニッケリーには、スリナムを代表する黒人活動家のコムファリウス(T.A.C. Comvalius)がいた。彼はパン・アフリカニズムの影響を受けつつ、スリナムにおける黒人意識の覚醒に積極的な役割を果たした。この記念碑の設置にコムファリウスの関与があつたかは、詳らかではない。

⁷ スリナムで最大のエスニック・グループは、ヒンドスタンである。民族別人口構成の統計は、1971 年を最後に実施されていないため、現在の割合は不明であるが、その時点で全人口の約 40%を占めていた[Bakker 1998: 97]。クレオールがそれにつづき、ジャワ人が 3 番目に位置する。各エスニック・グループによる政党結成は、第二次世界大戦後の 1946 年からはじまる。なお、本報告書では英領インド移民を現地

していた。結局、ラシモンが修正案を提出し、これが議会で採決されることとなった。ラシモンの修正案は、7月1日を公務員の休日とする妥協案であった。ペンゲルは修正案に同意した自らの会派に失望し、採決前に議場を退出し抗議の意思を示した。

1959年に政府は、国内の政治・宗教他諸団体に呼びかけをおこなった。そのなかで、政府は「将来、精神のおよび社会的な自由を勝ち取ったことの追憶と祝賀の日として、自由の日が設けられる」ことが望ましいと述べ、諸団体からのパブリックコメントを求めた。翌1960年2月2日に政府は「自由の日(De Dag der Vrijheden)」を定める決定をし、ここに7月1日はエスニック・グループの枠を超え、スリナム国民全体の祝日として公的な意味合いを強めることとなったのである[Gouvernementsblad van Suriname 1960 no. 10]。

「自由の日」が祝日と定められてから3年後の1963年は、奴隷制廃止から100周年にあたっていた。かつて法案提出の際に中心的な役割を果たしたペンゲルは、この年の選挙で首相の地位に就いていた⁸。奴隷制廃止100周年にあたり、総督とペンゲルは6月29日に連名で国民への布告を発する。そこでも、この日が国民全体の祝日であることが繰り返し強調されていた。

奴隷解放100年祭は、住民のなかでもクレオール集団にまず向けられたものである。まず、と私が言うのは、それが彼らのみに向けられているわけではないからである。というのも、解放とそれにとまらぬあらゆる事柄は、他の住民集団にとっても大変重要な意味を持っているからである[Gouvernementsblad van Suriname Proclamatie van 29 juni 1963]

また、7月1日には、首都パラマリボにおいて奴隷制の廃止を記念するモニュメントの除幕式が、ペンゲルによっておこなわれた。この記念碑は、彫刻家のヨゼフ・クラス(Josef Kras)によるものであり、「クワクワ(Kwakoe)」と呼ばれている。スリナムでは、水曜日に生まれた子供に「クワクワ」という名前をつける習慣が広くみられ、奴隷制の廃止された1863年7月1日が水曜日であったことから、記念碑にその名が付けられ

での標記に従いヒンドスタンとする。

⁸ ここまでみたように、7月1日の公定化はペンゲルという政治家の存在を抜きにして語ることはできない。第二次世界大戦後、オランダは、西インドに対して自治を認め、本国との対等な関係をうたった憲章を交付する。ペンゲルは、憲章の策定にあたって、スリナムを代表してオランダ側との交渉に臨んでいる。最終的に、1954年にオランダ本国との間で王国憲章が締結され、スリナムにも大幅な自治が認められたことは、スリナムの政治構造に転換をもたらすこととなった。それまでの白人を頂点として、肌の色のグラデーションにより構造付けられていた社会が、とにかくも選挙を基礎として選出された議員により運営されることとなったのである。ペンゲルは、この変化を最大限に活用しようとしたといつてよい。選挙区の区割をクレオールの政治家に有利に働くように定め、他のエスニック・グループに対する政治的な優位を構造化しようとした[Bakker 1998: 127-131]。政界に転出する以前は、労働組合のリーダーであったペンゲルは、大衆の政治的動員にも敏感であった。奴隷制の廃止を記念する祝日や記念碑は、これら黒人大衆の有権者を動員するための政治的資源としても理解されていたであろう。

た。記念碑は、鎖を断ち切った(ケティ・コティ)奴隷の立ち姿をあらわしている(図 5)。この記念碑の設置以降今日まで、7月1日には毎年この場所で式典が執り行われるようになり、大統領の国民へ向けたスピーチが恒例となっている。7月1日を祝日とすることが、奴隷制の過去を記憶する行為を特定の「時」と結びつけたとするならば、記念碑の設置は、奴隷制の過去を記憶する行為を、特定の「空間」と結びつけ、可視化することを可能にしたのである。

こうして、7月1日は教会から解き放たれることで新たな意味を政治的に付与され、民族の相違を超えたスリナム国民の形成に基盤を与えたかのようであった。しかし、130周年を迎えた1993年7月1日に、「自由の日」の呼称が変更されることになる。この年、政府により設置された「奴隷制からの解放を追憶するための委員会」は、「1863年7月1日はアフリカ系スリナム人のみにとって歴史的な価値を有するものであるという事実から、今後この日はケティ・コティとする」ことを宣告したのである[Stipriaan 2004: 290]。7月1日の呼称の変遷は、それ自体がスリナム社会におけるアフリカ系住民の社会的地位の変化を象徴しているといってもよい。同時に、スリナムの置かれた独特の政治・社会的条件が、論理的な帰結として呼称の変化をもたらしたともいえる。

1863年の奴隷制廃止後に契約労働者としてスリナムに移住してきたヒンドスタン系住民や華人は、プランテーション労働に従事したのみならず小売業にも進出し、現在ではスリナム経済の中心的役割を担っている。また、これらのエスニック・グループは、高等教育を受ける機会も多い集団である。政治的には、どのエスニック・グループも選挙で過半数を獲得することができず、政権は連立を組まざるを得ない。異なるエスニック・グループ間の敵対的感情の高揚を和らげ、衝突を避けることは、スリナムという国を維持するうえで考慮すべき最優先課題とならざるをえない。そのためには、特定のエスニック・グループに関わる事柄を他の集団に優先させることは、集団間の均衡を逸することになるために好ましくない⁹。奴隷制廃止の記念日をスリナム国民全体に共有させることは、アフリカ系スリナム人以外のエスニック・グループから文化的均衡の軽視と受け止められる可能性がある。多文化主義の興隆による文化の多様性の尊重という考えも、名称変更を促す要因となった[De Ware Tijd 27 juni 1998]。

だが、「自由の日」の名称変更に対しては、アフリカ系スリナム人の危機感を加速させることにもなった。奴隷制の廃止は、単に奴隷の子孫だけにかかわることではなく、「この国の住民が、法的に平等であり、ここでは人間が他人の所有物になることは、もはやありえない」。このように、奴隷制廃止に込められた普遍的な意義を強調することで、呼称の変更に反対を表明する者もいた[De Ware Tijd 15 juni 1993]。また、いくつかのアフリカ系団体は、奴隷制の過去に条件付けられたアフリカ系住民の特殊性を強調することで、名称の変更に反対していた。

⁹ このような姿勢は、記念碑の設置にも反映している。首都のパラマリボだけでも、1990年にジャワ移民100周年記念碑、1994年に英領インド移民移住121周年記念碑、そして2003年には華人移住150周年記念碑が設置されている[Memorials of Suriname 2003]。

こうした団体によると、アフリカ系住民を特徴付ける重要な要素は、文化的脆弱性である。それは、奴隷制により名前・言語・信仰を奪われ、奴隷制の過去を積極的に受け止めることができなかった結果もたらされたのである。これに対して契約労働者としてスリナムに移住してきたエスニック・グループは、それぞれが固有の文化を維持して現在に至る。「隣人が文化的にとっても豊かな背景をもつ者であるならば、そこには文化的均衡は存在しない」。両者の文化的均衡は、このような奴隷制に根ざす歴史的条件を考慮すべきであり、「それこそが多民族社会内部の国民形成にとって重要」なのである[De Ware Tijd 27 juni 1998]。一部では、「奴隷制の 300 年を契約労働の 10 年と比べてはならない」、といった挑発的な表現で不満を表す者もいた[Paramaribo Post 19 juni 2003: 25]。

こうした発言は、他のエスニック・グループとアフリカ系集団との間の緊張をかつてないほど高めている[Paramaribo Post nr44 September 2004]。アフリカ系住民に対しては、あたかも彼らだけが、歴史上の「受難を一手に負っているかのような」との非難がよせられた。アフリカ系住民の間に、自らをスリナムの礎を築いた集団とみなす傾向が存在していることに対しても、植民地化以前から居住する先住民の記念日を引き合いに出して反論がなされている。また、ヒンドスタンにとっては 6 月 5 日、ジャワ人にとっては 8 月 9 日、華人にとっては 10 月 20 日、逃亡奴隷の子孫にとっては 10 月 10 日といったように、事態は、各エスニック・グループ独自の記念日の公的承認へと推移してきている。

おわりに

ここまで、本国と旧植民地において、奴隷制の過去を記憶する試みを素描してきた。このような試みに対しては、様々な批判も寄せられている。奴隷制廃止を記念するモニュメントの設置にあたって、かつての植民地であるスリナムでは、オランダ政府の対応を不十分とみなす傾向が強く、奴隷制への補償を求める動きが出てきている[Zunder 2004]。他方、オランダ本国では、オランダ人は自国の文化に誇りを持つべきであり、移民はオランダ社会により適応すべきである。奴隷制の過去は当時の文脈で判断すべきであり、政治的介入による記憶の共有は、かえって民族間対立や憎悪を増幅させるのみである、といった批判が寄せられた。だが、記憶の共有を単純な「市場原理」に委ねることは解決策となりえない。そもそも、それこそがこれまでオランダ社会における奴隷制の記憶の不在を特徴付けてきた要因だったからである。

オランダ本国と比べると、かつての植民地であるスリナムの状況は、より複雑な様相を呈している。元来、エスニック・グループの枠を超えたスリナム国民形成のための核となるべく、奴隷制廃止の記念日である 7 月 1 日を「自由の日」と定め、記念碑を設置したはずが、かえってパンドラの箱を開けたように、各エスニック・グループによる記憶の公的承認と、集団間の緊張の高まりを現在では招いてしまっている。「自由の日」から「ケティ・コティ・デイ」への名称変更は、こうした事態の推移を反映したものであった。他方、オランダとスリナムで、オーラル・ヒストリーの手法を用いて奴隷制の記憶を記録する新たな試みもあらわれている

[Accord en Jurna 2003]。

オランダ本国で生じた、オランダ政府とプラットフォームとの間で顕在化した対立、あるいは、スリナムで顕在化しつつあるエスニック集団間の対立は、国民的な記憶の共有に潜む根源的な問いに関わっているといえるだろう。国民的な記憶とは、誰の記憶なのか。奴隷制の記憶はオランダ、あるいはスリナム国民全体の記憶なのか。それとも、記憶を継承して(生きて)きたアフリカ系住民の記憶を単に他のオランダ人、あるいは他のエスニック・グループが承認することを意味するのか。反対に、奴隷制の記憶はアフリカ系住民のみが特権的に語りうるのか。国家は、特定の記憶を社会に共有させることが可能であり、許されるのか。これらの問いに対する議論は、これから深められねばならない課題である。

付記:本報告書は、当該研究遂行時に成果の一部として公表した「帝国の過去・小国の記憶——奴隷制の記憶の共有をめぐる」と題する小論に大幅な加筆・修正を加えたものである[吉田 2002]。

参考文献

Accord, Clark en Nina Jurna

2003 *Met eigen ogen: Een hedendaagse kijk op de Surinaamse slavernij.*
Amsterdam: KIT Publishers.

Bakker, Eveline

1998 *Geschiedenis van Suriname: Van stam tot staat.* Zutphen: Walburg Pers.

Biekman, Barryl

2002 *Realisatie van het Nationaal Monument Nederlands Slavernijverleden.*
Den Haag: Albani

De Volkskrant (全国紙ーオランダ)

De Ware Tijd (全国紙ースリナム)

Emmer, Piet

2000 *De Nederlandse slavenhandel 1500-1850.* Amsterdam: Uitgeverij De
Arbeiders Pres.

Gouvernementsblad (官報)

Haasse, Hella S.

2002(1992) *Heren van de thee.* Amsterdam: Querido's Uitgeverij.

Handelingen/Bijlagen Staten van Suriname (スリナム議会議事録)

Handelingen van de Tweede Kamer (オランダ下院議事録)

Kousbroek, Rudy

1995 *Terug naar Negri Pan Erkoms.* Amsterdam: Meulenhoff.

Langeveld, Herman

1998 *Hendrikus Colijn 1869-1944.* Amsterdam: Uitgeverij Balans.

Oostindie, Gert (red.)

1996 *Fifty years later: Antislavery, capitalism and modernity in the Dutch orbit.*
Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Oostindie, Gert (red.)

1999 *Het verleden onder ogen: Herdenking van de slavernij.* Uitgeverij Den
Haag: Arena/Prins Claus Fonds.

Palm, Jos,

2005 *De vergeten geschiedenis van Nederland: Waarom Nederlanders hun
verleden zouden moeten kennen.* Amsterdam: Athenaeum-Polak&Van

- Gennep.
- Paramaribo Post (月刊誌—スリナム)
- Raben, Remco (ed.)
- 1999 *Representing the Japanese Occupation of Indonesia*. Zwolle: Waanders
Uitgeverij.
- Sas, N. C. F. van (red.)
- 2005(1995) *Waar de blanke top der duinen: en andere vaderlandse herinneringen*.
Amsterdam: Uitgeverij Contact.
- Somers, Erik en Stance Rijpma (red.)
- 2002 *Nederlanders Japanners Indonesiërs: Een opmerkelijke tentoonstelling*.
Zwolle: Waanders Uitgevers.
- Stichting Wetenschappelijke Informatie
- 2003 *Memorials of Suriname* CD-Rom. Paramaribo: SWI
- Stipriaan, Alex van
- 2004 “July 1, Emancipation day in Suriname: A contested Lieu de Mémoire,
1863-2003”, *Nieuwe West-Indische Gids* vol. 78 no. 3&4, pp. 269-304
- Zunder, Armand
- 2004 *Suriname: Een Nederlandse creatie en geldmakerij van allure!*
- 岩崎稔
- 2001 「特別ワークショップの記録 『占領の記憶をどう描くか?』」『*Quadrante*』No.3,
pp.26-62
- 佐藤弘幸
- 2001 「史実を無視した一方的な「記憶」——いわゆる「オランダ戦争展」の悲喜劇——」
『*Quadrante*』No.3, pp.18-25
- テッサ・モーリス＝スズキ
- 2002 『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』平凡社
- 百瀬宏
- 1990 『ヨーロッパ小国の国際政治』東京大学出版会
- 吉田信
- 2002 「帝国の過去・小国の記憶——奴隷制の記憶の共有をめぐって」『*創文*』No.447



図 1

ライデンにある戦没者追悼碑。記念碑の手前にある碑文には、戦死者名について、「オランダ軍人としてライデンからオランダ領東インドに従軍し、再び戻ることのなかった者達の追憶のために」と刻まれている。



図 2

アムステルダム東公園の奴隷制廃止を記念するモニュメント。



図 3

後部の拡大写真。鎖につながれた奴隷たちの姿は、過去を現している。



図 4

くびきを解かれ両手を空に高く掲げた姿は現在を象徴している。



図 5

パラマリボにあるクワクゥ像。この像を作成したヨゼフ・クラスは、独学の彫刻家である。クラスは、クワクゥ像以外にも、多くの記念碑作成に携わっている。